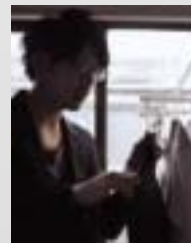




松井 創斗
(まつい そうと)

日本大学
理工学部
海洋建築工学科



街喰う建築 ～粘菌的建築手法の提案～



現代の都市更新の在り方に疑問を感じる。スクラップ&ビルドという毎回0スタートを踏むやり方では、その街にしかない魅力や思い出は消し去られてしまう。敷地の新木場は現在「貯木場」という機能を失った。そして、この街に流れる「ものづくりの魂」や「職人達の繋がり」は簡単に消されようとしている。

枯れた街をリセットするのではなく、枯れた街を栄養として生きる、粘菌のような建築の提案をする。その街に続く物語や、その街にしかない風景は建築が出来る上での栄養だと考える。

粘菌的建築は、枯れた倉庫を貫き覆い成長する。「製材」の先「加工」の街として、職住一体の街となる。この街の栄養を貪欲に貪った粘菌的建築は、新木場を新たな「モノづくりの街」として動き始める。

講評

制作意図によれば、粘菌とは、現代の市場経済のメタファーである。一方、この地に刻まれてきたのは近世まで遡ることのできる河岸市場、つまり、伝統的な経済文脈の上に自由市場経済を培養して現れたのが本作だということになる。乱暴なプログラムである。作者の主たる興味はあくまで経済活動の提案にあって、粘菌という隠喩を空間造形の手法であるなどと邪推してはならない。この図面や模型の示す空間が作者の意図した造形かどうかは定かでないのである。にも拘らず、模型をつぶさに観察すると、魅力的な空間が随所に仕込まれているのが分かる。粘菌の仕業にないと思しき造形も垣間見える。妙である。この際、本作の計画原理は不問に付そう。その代わりに、もっと徹底的に造形し尽くしてもらいたい。粘菌の、もとい、作者の技量にはまだまだ余力がある。(審査委員：矢野 裕之)

